

■ 極上の一冊が待っている ■

19世紀のヨーロッパ、一人の本好きの貧しい少年がいた。毎日仕事の行き帰りに書店の前で立ち止まり、ショーウインドウを眺めていた。そこには一冊の本が巻頭の扉を見せて飾られていた。読みたくても買うお金はなかった。

ある日のこと、本のページが1枚めくられていた。少年はそのページを読んだ。翌日もまた、ページが1枚だけめくられていて、少年は続きを読んだ。そんなふうにして毎日めくられていく本を少年は何カ月もかかって読み終えることができた。

この話は、鶴ヶ谷真一のエッセイに、「立ち読みにまつわる最も美しい話」として紹介されている。毎日、さも読みたそうに本をのぞきにくる少年の姿を見ていた店主のさりげない計らいだった。

先週の土曜日に読書週間が始まった。この季節になると本が恋しくなる。本校の図書室は改修工事を終え、白を基調に美しく生まれ変わった。生徒たちの手により書籍が再度運び込まれば、オープンを迎える。単行本でも、新書でも、雑誌でもいい。ぜひお気に入りの一冊を探しに来てもらいたい。

元SKE48松井玲奈の最も思い入れのある本は『星の王子様』である。自分の感性や価値観の一部は少女時代に触れた物語でできていると考えている。だから、凝り固まったつまらない大人になってしまいそうなときに、この本を手に取り自身を振り返り、心の整頓をしているという。

私にも大切にしている文章がある。詩人の故石垣りんの書いた「花嫁」である。800字にも満たない単文で、まだアパートに風呂などなかった昭和時代の、公衆浴場での見知らぬ女性との一場面を書いている。

読むたびに、身近にある平凡な生活の中にささやかな幸せが落ちていることにいつも気づかされる。華やかなものやドラマティックなものに奪われそうになっている耳目を、足下の大切なものへとそっと向けてくれる。私が本を読むのは、自分の心の拠り所となるものを探すという営みなのかもしれない。

鶴ヶ谷が言うには、先の立ち読みの話は実話とのことだ。少年が誰だったかは思い出せないが、後に歴史に名を残す人物になるという。手に触れることもできなかった本だが、少年にとっては、店主の心遣いととも、いつまでも心に残る一冊になったに違いない。

本との出会いが人生を豊かにしてくれる。心に残る本を探しに出かけよう。極上の一冊がどこかで私たちを待っている。

参考：「古書店の思い出」【鶴ヶ谷真一】『月光に書を読む』

「心の毛玉の解き方」【松井玲奈】『図書』H29.6月号